

教員の国際性の捉え方に関する研究 —性別、年齢層別、所属教育機関別、居住地域別の違いの検討—

早矢仕 彩子*

Teachers' Internationality Awareness —Analysis by sex, age, institutions and residential area—

HAYASHI Saiko

要 約

“国際性”ということばは、教育の理念や青年の育成を語る時などに頻繁に使用されているにもかかわらず、それが具体的には何を意味するかはあまり明確ではない。本研究は、全国の保育園・幼稚園から大学・大学院までの教員1032人の質問紙への回答を分析し、教育に携わる彼らが“国際性”ということばをどう捉えているかをまとめたものである。

大カテゴリーで見ると、国際性に1番大切なものとして選択されたのは、『考え方、価値観など』、2番目に大切なものとして選択されたものは『語学』に分類される記述であった。国際性の捉え方に性差はあまり見られなかったが、年齢層による違いが見出された。所属機関別、居住地域別ではその違いは明確とは言えないが、ある程度の傾向が見出された。

教員自身の国際性の評価は大学生よりは高く、国際性は有用であるという回答が圧倒的多数で、また少しずつ国際性を伸ばすべく努力するという回答が最多であった。大学生の回答と比較して教員の回答からは国際性に対してより積極的な姿勢が見える。

キーワード：国際性 語学能力 コミュニケーション能力 海外経験

1. 問題意識

1-1. はじめに

近年の日本の教育界においては、保育園、幼稚園、小中学校、高校、大学、大学院などのどの教育段階においても、幼児、自動、生徒、学生たちに国際性を身につけさせることが大切なこととして、その教育目標のなかに組み込まれている。

中央教育審議会第1次答申「新しい21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」に、国際理解を背負っていくべき若者に対する国際理解教育の必要性が盛り込まれたのは平成8（1996）年のことである。その中には①広い視野を持ち、異文化を理

解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること、②国際理解のためにも、日本人として、また個人としての自己の確立を図ること、③国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基本的な力を育成する視点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること、の3つに留意して教育を進めていく必要があると書かれている。これからの社会を背負う子ども達を教育するにあたって、「国際理解教育」の必要性が高らかに謳われ、これからの青少年には日本のみならず世界に視野を広げ、日本においても外国においても活躍でき、また外国人ともコミュニケーションが出来る能力を養うことが必要であるということが明確に示されてい

* 中部大学現代教育学部児童教育学科

る。現在ではそのような時代を経て、よりコミュニケーション能力を伸ばすことの必要性が重要視されるようになってきた結果、「外国語活動」という名前の“世界には色々な国や言語があることを知り、その中でコミュニケーション能力を伸ばすことを目的にした学習”が新しい小学校の科目として文部科学省によって導入された。その後も国際性、グローバル化は、教育現場においてますます重要なこととして捉えられる傾向は続き、文部科学省ではそれからの方針として学校現場における国際性の涵養をより重要視する流れとなり、中央教育審議会第1次答申から15年が経過した平成23(2011)年度からは、外国語活動を小学校5、6年生における科目として小学校教育の中に位置づけ、現在は全国の小学校において外国語活動が実施されるようになってきている。

産業界からも、これから育っていく若者が国際性を高め、世界各国で活躍できるような資質を持つことが期待されており、それぞれ諸外国に目を向け、グローバルな考え方を身に着けた若い世代を育てることが、各教育段階の教育機関において期待されていることである。いまや、国際的、国際性、グローバル、インターナショナルなどの概念がますます重要なものとして意識されるようになってきている。本研究は、このような流れをふまえた上で、各教育機関の教員たちは、国際性をどのように捉えているのか、またどのような捉え方を持った教員たちが教育活動をしているのかを明らかにすべく行われた研究である。

1-2. 本研究の目的

早矢仕は、人々の国際性の捉え方に関する研究を継続し、これまでに、C大学学部生を対象とした質問紙調査結果の分析(早矢仕、2009)、米国O大学での質問紙調査の結果分析(早矢仕、2010)、全国の大学生を対象とした調査結果(早矢仕、2011)を報告してきた。いずれの調査も質問項目と回答方法はほぼ同じになるようにして調査を行った。回答方法は大学の授業を利用して教室において直接調査用紙を配布して記入後回収する方法と、Web調査による方法を用いている。

これらの調査の国際性の捉え方の調査部分では、“国際性がある、ない”という場合の国際性という

ことばの意味内容を訊ね、10の回答欄を設けた回答用紙に思いつくだけ記入をしてもらい、次に、今記入したものの中で、最も大切だと思うもの、次に大切だと思うものの2つを選び、その番号を記入してもらった。

C大学生を対象とした調査結果(早矢仕、2009)からは、大学生たちは国際性があるということについては外国語能力、特に英語力を備えていることを最も重視しており、国際性は現代社会を生きる上で有用なものであるという考えを持つ者が多かったが、自分自身が国際性を身につけるために努力する意志はあまり強くなかった。しかし国際性の捉えに関しては年齢が上がるにつれて幅広い捉え方がなされる傾向があるのではないかとということが示唆された。

日本全国各地域の大勢の学生を対象とした研究(早矢仕、2011)では、全国の高校、大学生792人分のデータを分析した結果、「国際性」に1番大切なもの、2番目に大切なものとして選択されたのは語学力カテゴリーの記述であった。次いでコミュニケーション能力、海外経験などのカテゴリーの記述が続いた。調査対象者は男女差や年齢差に極端な偏りはなかったことから、性差や学年差の検討が可能であったが、性差は見られなかった。学年差としては年齢が上がるにつれて少しずつ幅広い捉え方をする傾向が少し見られ、また、国際・外国語系専攻者には考え方や価値観カテゴリーに入るものを他の専攻系の学生よりは重視する傾向が見られた。また、大学生の自らの国際性の評価は高くないが、国際性は役に立つという回答が圧倒的多数であり、学年が上がるにつれて少しずつ国際性を伸ばすべく努力するという回答が増加する傾向があった。

今回は、全国の保育園・幼稚園から、小学校、中学校、高校、大学・大学院、の各教育機関の教員たちの回答の分析結果を報告する。これらの教育機関では教育目標の一つとして“国際性を身につけさせる”、“国際性豊かな人間を育てる”などのようなことを謳っていることが多いが、それらの教育機関で教育に当たっている教員は、国際性をどのように捉えているのか、また各教育機関で教育を受ける期間、子どもや学生にとっては、その教育機関に属する教員たちはおそらく家族や親戚以外では最も関わりを

多く持つであろう身近な大人であるが、教員たちの国際性の捉えかたは、学生たちの国際性の捉え方と同様な傾向が見られるのかどうかを検討する。

2. 研究方法

2-1. 調査手続

インターネット上で質問項目に、クリック、数値の記入、語句や文章の記入などで回答をさせる形式のWeb 質問調査を行った。質問文は全国の登録モニターに対して一斉にEメールで配布され、それに対する回答の返信により回答が収集された。分析対象としたのは、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学・大学院等教育機関の教員たちの回答である。分析対象回答数は1,032名であった。回答者の内訳はTable. 1に示した通りである。

2-2. 質問紙の構成

初めにスクリーニング項目として所属教育機関の種類、勤続年数、常勤非常勤の別、居住都道府県名を問うた。氏名欄は設けず無記名とした。

質問項目は、まず「あなたはいろいろなところで、『国際性を身につける』、『国際性のある人』、『国際性を育てる』、『国際性教育』などの表現を見たり聞いたりすることがあると思います。ここに使われている『国際性』という言葉は、具体的にはどんなことを意味しているのでしょうか」という教示のあと、国際性がある、ないという時に考える内容をできるだけ沢山、自由記述欄に記入してもらった。

回答欄は番号をつけて10行設けた（回答数は自由、最大10）。次に、記述された複数の回答のうち一番大切だと思うものは何か、2番目に大切だと思うものは何かと問い、番号で答えてもらった。

さらに自分自身の国際性についての質問に移り、自分自身の国際性を「大変豊かである」～「ほとんどない」の5件法で評定させた。続いて、現代社会を生きる上で国際性が役に立つかどうかを、「大変役に立つ」～「全然役に立たない」の5件法で、また「国際性豊かな人」といわれるよう努力するかどうかを同様に5件法で評定させた。

その後、外国、外国人に対する興味や態度を質問するために、今後外国に行くことについてどう思っているかを、「外国に滞在したい」～「外国には絶対に行きたくない」の5件法で回答を求める項目、日本国内での外国人とのつきあいについて同様に5件法で回答を求め、さらに自文化他文化に対する4つの態度（文化的態度）をあらわす文章4つから自分の考えにもっとも近いものを選択式で聞く項目が続いた。最後に半年以上の留学または海外滞在経験の有無、国、期間、外国人との親しい付き合いの有無、関係、期間、外国旅行の経験の多少または無、回数、主な旅行先、日数、外国人滞在（在住）の経験の有無、主な滞在先、期間等についてもたずねた。

3. 分析の手順

3-1. 分析までの準備手続

3-1-1. 評定のためのカテゴリーの作成

早矢仕（2009）では人の国際性についての記述を分類するための枠組みとして8つの大カテゴリー、18の小カテゴリーからなる分類枠を作成し、早矢仕（2011）では小修正を施してより妥当なカテゴリーを完成させたが、本研究ではこの早矢仕（2011）のカテゴリーを用いて分析を行った。用いられた分類枠はTable. 2に示した通りである。

Table. 1 回答者内訳

人数				性別		所属教育機関				勤務形態		経験年数			居住地域						
		男性	女性	保育園 幼稚園	小学校	中学校	高校	大学 大学院	常勤	非常勤	5年 以内	6-10年	10年 以上	北海道	東北	関東	中部	関西	中国 四国	九州 沖縄	
20-29歳	113	42	71	8	41	16	37	11	89	24	90	23	0	2	9	36	22	30	8	6	
30-39歳	322	158	164	8	78	76	81	79	280	42	62	148	112	21	31	98	49	49	34	40	
40-49歳	333	169	164	6	83	80	83	81	246	32	16	36	281	17	28	121	60	43	35	29	
50-59歳	264	165	99	5	78	67	56	58	201	16	3	10	251	22	17	73	59	56	23	14	
合計	1032	534	498	27	280	239	257	229	918	114	171	217	644	62	85	328	190	178	100	89	

Table. 2 国際性に大切なもの 分類カテゴリー

大カテゴリー	小カテゴリー
1 語学	11 英語・英語など 12 外国語、他言語、多言語
2 外国人との交流	21 (外国人との) コミュニケーション能力 22 現に外国人との交流がある
3 国際的な活動・仕事をする人	31 国際的な有名人 32 国際的な仕事をする人
4 国際情勢、外国文化に関心・知識、外国が好き	41 国際情勢に関心・知識 42 外国文化に関心・知識 43 外国に興味、海外が好き
5 外国経験・留学経験	51 外国旅行 52 留学、在住
6 性格特性・性格特性	61 性格特性 62 行動特性記述 63 能力・頭の良さ
7 考え方、価値観など	71 差別偏見がない 72 他文化に対する理解 73 広いものの見方・考え方、グローバル、インターナショナル 74 自文化を知ること・誇り 75 思いやりの心
8 その他	80 その他 81 無回答

3-1-2. 1 番大切なもの、2 番目に大切なものについての回答確定と評定作業

この調査では、国際性に大切なものを思いつくだけ書かせるために 10 の欄を用意し、書かれたものを見ながらあらためて、その中で 1 番大切なもの、2 番目に大切なものの番号を取り出して書かせる形をとった。

最初に思いついたものと、1 番大切なものは異なる場合が多い。実際のこの研究においても、最初に思いついた回答を 1 番大切なものとして選択した者は、1,032 人中 559 人 (54.2%) に過ぎず、改めて 1 番大切なものは何かと問うて考えてもらうことにより、より厳密な形で 1 番大切なもの 2 番目に大切なものについての回答を得ることが出来たと考えている。

1 番大切なものの回答、2 番目に大切なものの回

答はそれぞれ全 1,032 人から得ることが出来た。それらの回答の 1 つ 1 つを、Table. 2 の評定カテゴリーにより、どのカテゴリーに入るかを評定していき、各カテゴリーに入る記述数を数え、回答比率を計算し、グラフを作成した。

4. 結果と考察

4-1. 国際性の捉え方

4-1-1. 人の国際性に 1 番大切なもの

1,032 人から得られた 1,032 個の国際性に 1 番大切なものの記述のカテゴリー分類結果を Figure. 1 に示す。

以下各カテゴリーに分類された記述数とパーセンテージを見ていくが、大カテゴリーを『 』、小カテゴリーを「 」で区別して記述していくこととする。

国際性に一番大切なものとしては、大カテゴリー

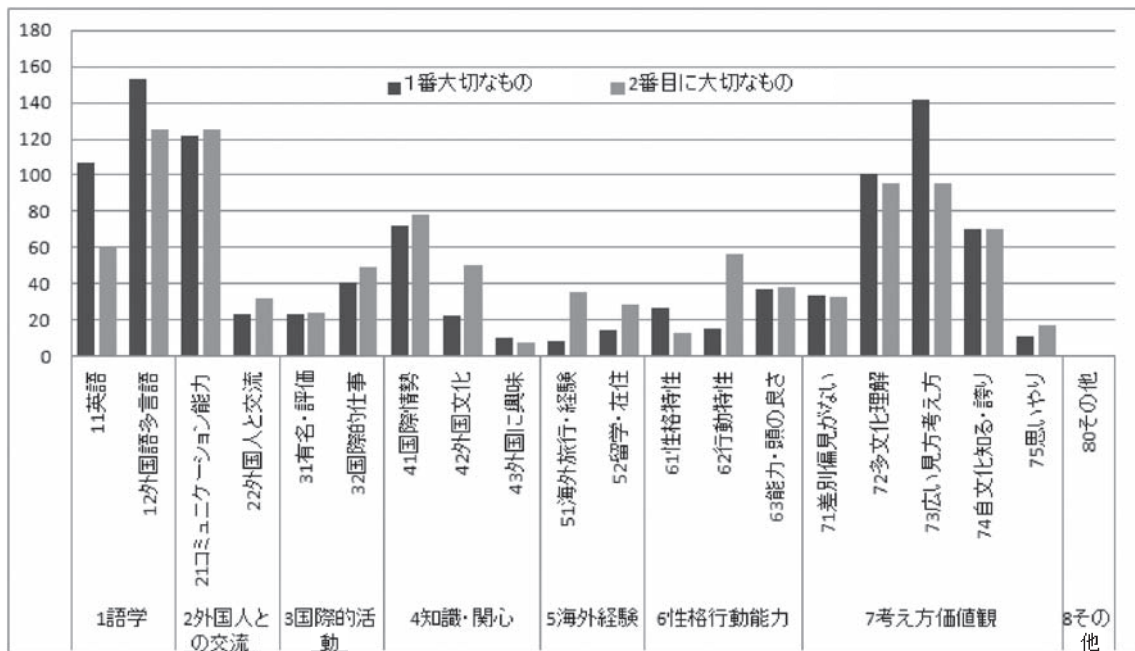


Figure. 1 国際性に1番大切なもの、2番目に大切なもの（回答人数）

では『考え方価値観』が最多で358（34.7%）となっている。これは小カテゴリーとしては、「差別偏見がない」（差別や偏見がないこと）、「多文化理解」（多文化理解ができること）、「広い見方考え方ができること」、「自分化を知る・誇り」（自国自文化を知り、また誇りを持っていること）、「思いやり」（思いやりのところがあること）、などが含まれている。今回の教員の回答結果からは、国際性を持つということに一番大切なものは考え方・感じ方・価値観などであり、その人が内面に持っているものこそが大切なものであるという回答が多かった。

その次に多いのが『語学』で260（25.2%）である。小カテゴリーでは「外国語多言語（外国語が話せる、多言語が使えるなど）」が153（14.8%）、「英語」（英語が話せる、英語に堪能など）が107（10.4%）である。さらに『外国人との交流』のうちのコミュニケーション能力（外国人とのコミュニケーション能力があること）「外国人と交流」（実際に外国人との交流をしていること）など『外国人との交流』カテゴリーに入る記述を合わせて考えると、英語など外国語能力が備わっていて実際に議論ができる、または外国人と実際に交流をしているということが、国際性を持つということには最も大切と考える人が多い。

そのほかの大カテゴリーで『国際的活動』（実際に国際的な活動をしている、またはした経験がある）、『海外経験』（外国経験が多い、または在住経験がある）、『知識・関心』（国際情勢に詳しい、外国文化を知っている、外国に興味がある等）などがそれに続いているが、この回答からこのような実際の経験や活動をしている・した経験がある、という外面的なことよりも、異文化とのつきあいや外国人との交流などにどのような心構えで臨むのかというようなことの方がより重要であると考えている教員が多い。

4-1-2. 国際性に2番目に大切なもの

国際性に2番目に大切なものとしては、大カテゴリーでは『考え方価値観』が最多で312（30.2%）となっている。この小カテゴリーには、「差別偏見がない」（差別や偏見がないこと）、「多文化理解」（多文化理解ができること）、「広い見方考え方ができること」、「自分化を知る・誇り」（自国自文化を知り、また誇りを持っていること）、「思いやり」（思いやりのところがあること）、などが含まれている。国際性に2番目に大切なものとして一番目に大切なものと同様、考え方・感じ方・価値観など、その人が内面に持っているものを選んだ教員たちが最も多かった。

2番目に大切なものとして人得られた1,032個の

記述の評定結果も、Figure. 1 に示してある。上述のように、『考え方価値観』大カテゴリーのものを選択した回答者が最も多かったが、次に多かったのが、英語、外国語に関する記述である。「英語」、「外国語」はそれぞれ 60 (5.8%)、125 (12.1%) であり、『語学』大カテゴリー全体では 185 (17.9%) であった。さらに『外国人との交流』のなかの「コミュニケーション能力」でも 125 (12.1%が二番目に大切なものとして挙げられており、実際に交流能力があり、または交流ができているとする『語学』『外国人との交流』大カテゴリーを合わせると『考え方価値観』大カテゴリーの回答より多くなっており、やはり語学などを駆使して実際に交流できることも重要視されている。

それに比べて、『国際的活動』（実際に国際的に活躍している、国際的な仕事をしている）、『海外経験』（海外経験が多い、外国滞在経験の有無など）というものを選んだものは少なくなっている傾向も、一番目に大切なものの回答傾向と同様である。

以上から、教員の国際性に対する捉え方の一般的傾向としては、まずは考え方や価値観など国際的な活動をする場合に必要な内面的な準備性が最も重要視されており、次に語学力があること、コミュニケーションがうまくできることが重要視されていること

がわかった。

以上、国際性に 1 番大切なものの回答と、2 番目に大切なものを別々に分析してみたが、どちらも同様に、考え方、態度など内面的なものが最も多く挙げられており、ついで語学能力、コミュニケーション能力などが重要視されている傾向は同じであった。つまり、1 番大切なものに上記 2 つのうちのどちらかを、そして 2 番目に大切なものに上記の二つのうち 1 番目に挙げなかった方を選ぶ回答者が多いということになるだろう。この結果から、教員たちの考える国際性の二大要因は、考え方価値観と、語学コミュニケーション能力であると言える。

4-1-3. 性差についての検討

国際性に 1 番大切なものの回答を男女別に分けて、その分布を見た (Figure. 2)。グラフでは煩雑になるため、回答比率のみを示すこととした。

全体の回答の分布の形は男女では似た形となっており、回答の比率もあまり大きな違いは見られなかった。特に、1 番目に大切なもの、2 番目に大切なもの選ばれた頻度の高かった『考え方価値観』『語学』『外国人との交流』の 3 つの大カテゴリーでは、男女でほとんど同様な回答傾向であった。強い

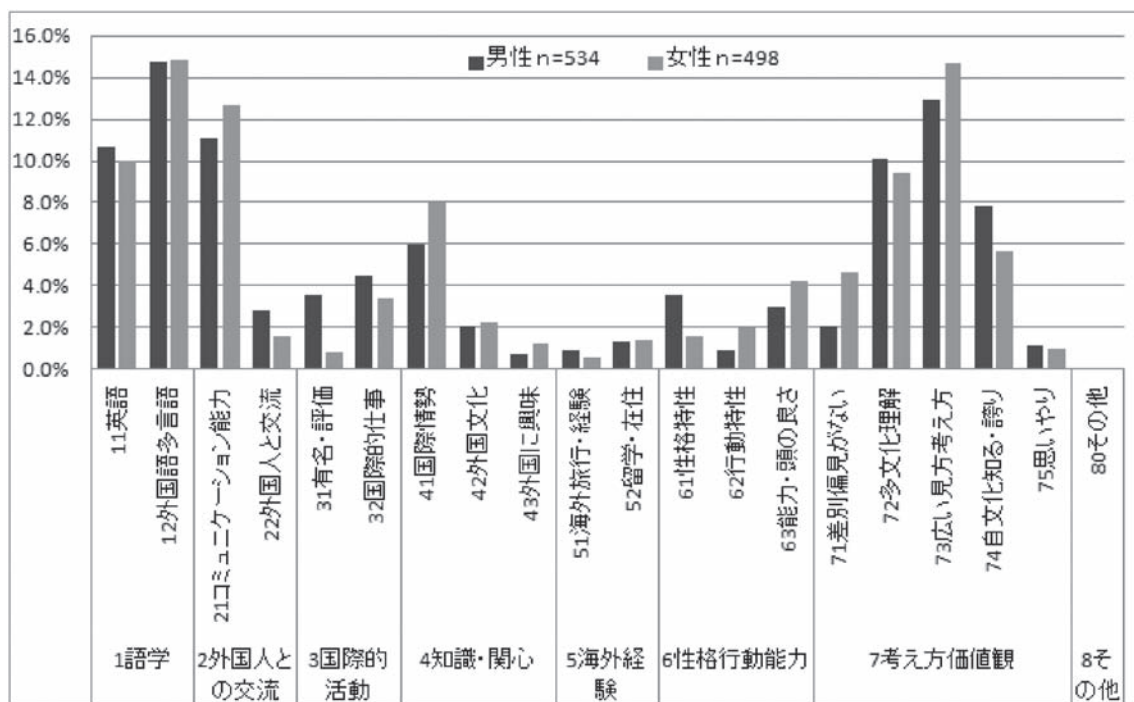


Figure. 2 国際性に 1 番大切なもの 性別回答率

て回答傾向の異なるところを挙げるならば、『国際的活動』であり、男性の方がこれを選ぶ人が多い傾向が見られた。「有名・評価」（国際的な有名人の名前、国際的な職業名も一部含まれる）は男性では19（3.6%）に対して女性では4（0.8%）となっており、また「国際の仕事」（今国際的な仕事をしている、or していた）（男性24（4.5%）、女性17（3.4%））、を加えると『国際的活躍』大カテゴリーの記述が男性43（8.1%）、女性21（4.1%）という結果になっている。男性の方が具体的に今、何らかの国際的な仕事をしていることが国際性があることだという考え方をする人が多いということであろう。

また、『考え方価値観』大カテゴリーの中では「差別偏見」（差別や偏見がないこと）という記述が女性に比較的多く、男性では「自文化知る・誇り」が比較的多かったという結果がみられるが、考え方価値観大カテゴリーの記述数全体は同程度であった。本調査では十分な回答数を得て性差を見ることが大きな目的の一つであったが、性差はあまり大きくないという結果であった。

4-1-4. 年齢差についての検討

今回の調査では22歳から59歳まで幅広い年齢の回答者からの回答を得ることができた。

先述したように教員全体としては、『考え方価値観』、『語学』大カテゴリーの回答数が多く、教員たちの考える国際性の二大要因は、考え方や価値観などその人の内面と、語学を中心としたコミュニケーション能力であることを見てきた。しかし年齢層別により細かく見ていくとどのような傾向が見られるかを検討するために、年齢層別に分けて回答比率を検討した。回答者の実年齢から、20歳代（20-29歳）、30歳代（30-39歳）、40歳代（40-49歳）、50歳代（50-59歳）の4群に分け、その回答比率に違いが見られるかどうかを比較したものがFigure. 3である。

Figure. 3に見るように、年齢層別に見るとかなりはっきりとした回答傾向の違いが見いだせた。

『考え方価値観』大カテゴリーに評定される回答の回答率は、20歳代：24.7%、30歳代：30.2%、40歳代：35.76%、50歳代：41.3%、と年齢の高い層ほど多くなっている（グラフに表示されたのは小カテゴリーの回答比率であり、その合計が大カテゴリーの

回答比率である）。逆に『語学』大カテゴリーの回答は20歳代：38.9%、30歳代：29.5%、40歳代：21.9%、50歳代：18.2%、と年齢の低い層ほど多くなっている。20歳代では『考え方価値観』大カテゴリーの回答比率よりも『語学』大カテゴリーの回答比率の方が多くなっており、また30歳代ではわずかに『考え方・価値観』大カテゴリーの方が多かったものの、その差は僅かで、40歳代では、逆に『語学』大カテゴリーよりも『考え方価値観』大カテゴリーの方が多くなっている。そして50歳代ではその差がさらに開き、『考え方価値観』大カテゴリーが最も多くなっている。

早矢仕（2011）では18、19才の学生の方が20才以上に比べると、語学が大切という回答比が高い理由として、①高校までの教育や英語学習の影響で国際性＝語学という考えが強く残っていること、②年齢が上がるにつれて次第に幅広く他の要素も考えられるようになることの二つを示唆したが、今回の教員対象の調査結果では、年齢が高くなるほど言語を重視する傾向が少なく、他の要因（特に考え方など）を重視する傾向が高くなることがより明確な形で示された。

4-1-5. 所属教育機関別の検討

ここでは、教員の所属機関別に、その回答傾向に違いが見いだせるかどうかについての検討結果について述べる。調査では教員の勤務先がどの教育機関であるかの記入を、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学・大学院の中から選択する形で求めていたので、所属機関別の集計が可能となった。回答が得られた保育園、幼稚園の教員数が少なかったことから、この2つはまとめて1つのカテゴリーとし、幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校、大学・大学院、の5つの所属グループに分けて、その回答を検討した。

5つのグループの回答結果を、Figure. 4に示した。

幼稚園・保育園を除くあとの4グループでは、『考え方価値観』大カテゴリーの回答が最も多く、いずれも30%を超えている（小学校：33.9%、中学校：39.7%、高校：33.1%、大学・大学院：35.4%）。それについて多いのは『語学』大カテゴリーの回答で

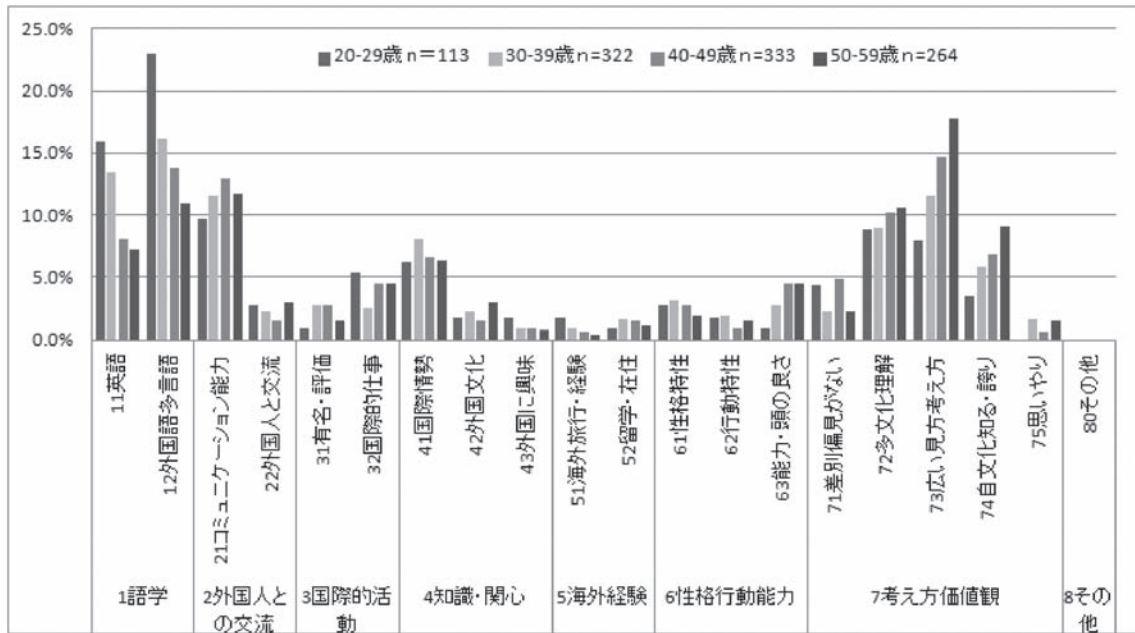


Figure. 3 国際性に1番大切なもの 年齢層別回答率

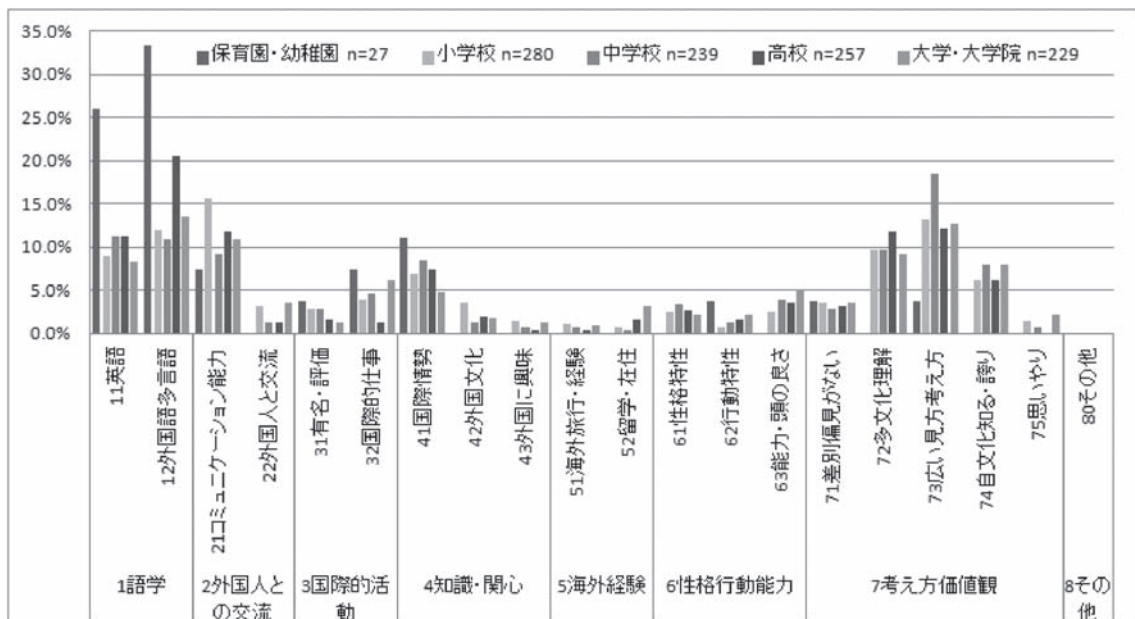


Figure. 4 国際性に1番大切なもの 所属教育機関別回答率

それぞれ20%以上となっている（小学校：21.1%、中学校：22.2%、高校：31.9%、大学・大学院：21.8%）。また『考え方価値観』大カテゴリーのなかの小カテゴリーの回答分布を見ると、この4グループではいずれのグループにおいても5つの小カテゴリーのうちの「広い見方考え方」カテゴリーの回答が最多となっていることも同じ傾向である。幼稚園・保育以外の4教育機関グループでは、高校の語学重視傾向が少し高いことが目につくが、あとはほとんど大きな違いはなく、同様の傾向を示している。一方幼稚

園・保育園教員はそれとは逆の傾向を示し、『語学』大カテゴリーの回答数が最多で16（59.3%）となっており、『考え方価値観』大カテゴリーの回答はわずか2（7.4%）となっている。他の4グループに属する回答者数は229～280人と多かったのに対して保育園・幼稚園教グループの回答者は全部で27人と非常に少なかったことから、誤差が大きい可能性も否定できないが、保育園・幼稚園教員は20歳代の若い教員が多かったことから、保育園・幼稚園教員の回答は教育機関別というより年齢層の特徴が強く出

たのではないかと考えられる。

4-1-6. 居住地域別の検討

居住地の47都道府県を、7ブロックに分けて整理したものがFigure. 5である。

グラフは小カテゴリーでのものしか表示されていないが、ここでは大カテゴリーで見ていく。『語学』大カテゴリーは「語学」と「外国語多言語」の二つの小カテゴリーを、『考え方価値観』大カテゴリーは「差別偏見がない」から「思いやり」までの5つの小カテゴリーの回答率を合算したものである。

北海道、東北、関東、中部、関西では『考え方価値観』大カテゴリーの回答が46.8%、32.9%、37.8%、30.5%、38.2%となっており、いずれも『語学』大カテゴリーの回答19.4%、25.9%、22.6%、27.9%、27.0%より多いが、中国四国、九州沖縄では『考え方価値観』大カテゴリーの回答が28.0%、25.8%、『語学』大カテゴリーの回答が27.0%、27.0%とほぼ同数となっている。北海道では特に『考え方価値観』大カテゴリーの回答が多く、『語学』大カテゴリーの回答が少ない。九州四国、九州沖縄では同数ぐらいとなり、関東、中部、関西など中間地域ではその間ぐらいとなっている。

一方で『国際的活動』大カテゴリーの、「実際に国際的な仕事をしているかどうか」、「国際的評価を受けているかどうか」については、北海道から順に9.7%、7.1%、7.0%、6.3%、7.9%となっているの

に対して、中国四国と九州沖縄では2.0%、1.1%とあまり重視していない傾向も見える。これらの結果から地域差の傾向はあるのかもしれないという感触が得られた。この回答傾向の違いは、その地方の歴史的特徴、地域性県民性の問題などからの解釈が可能かもしれないが、本調査の結果からは明確な結論を導くことはできない。

4-2. 教員の国際性自己評定と異文化に対する積極性等について

教員の国際性の自己評価、国際性は役立つか、国際性を見つけるよう努力するかなどの意見、および今後自分が外国へ行くことについての考え、日本国内での外国人との交流志向、日本国内での外国人との交流志向、文化的態度、海外経験などについての回答結果は、Table. 3としてまとめて示した。

4-2-1. 自己の国際性についての評定結果

自分自身の国際性はどのくらいあると思うかを5段階で評定させる設問に対する回答結果は、教員全体では「ほとんどない」「どちらかといえば少ない」とを合わせたものが45.7%で、「普通にある」「どちらかといえばある方」「大変豊かである」を合わせたものが54.2%となっている。この結果は、半数以上が自分の国際性は「ほとんどない」「どちらかといえば少ない」と評定していた学生の回答傾向（早矢仕、2011：以下、学生との比較はすべてこの研究による）

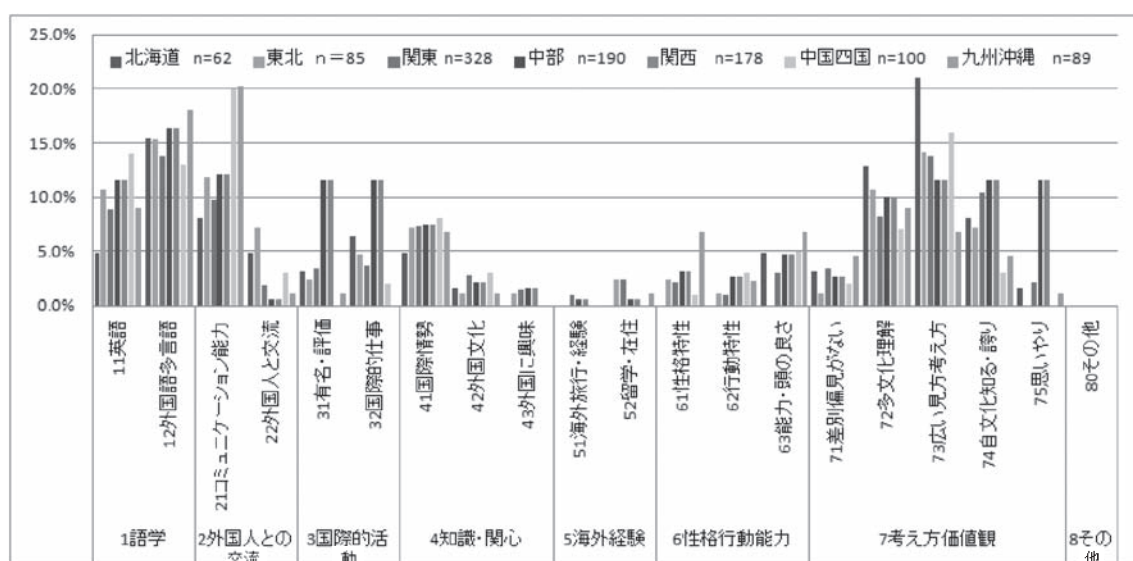


Figure. 5 国際性に1番大切なもの 居住地域別回答率

Table. 3 国際性、国際交流に関する考え等 回答結果
全体・性別・年齢層、所属教育機関別

Q3. 国際性自己評価														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. ほとんどない	131 12.7%	66 12.4%	65 13.1%	23 20.4%	47 14.6%	36 10.8%	25 9.5%	10 37.0%	33 11.8%	27 11.3%	42 16.3%	19 8.3%		
2. どちらかといえば少ない	341 33.0%	176 33.0%	165 33.1%	42 37.2%	106 32.9%	108 32.4%	85 32.2%	10 37.0%	107 38.2%	84 35.1%	81 31.5%	59 25.8%		
3. 普通にある	341 33.0%	186 34.8%	155 31.1%	22 19.5%	107 33.2%	124 37.2%	88 33.3%	1 3.7%	92 32.9%	81 33.9%	89 34.6%	73 31.9%		
4. どちらかといえばある	201 19.5%	101 18.9%	100 20.1%	24 21.2%	56 17.4%	59 17.7%	62 23.5%	5 18.5%	47 16.8%	42 17.6%	42 16.3%	70 30.6%		
5. 大変豊かである	18 1.7%	5 0.9%	13 2.6%	2 1.8%	6 1.9%	6 1.8%	4 1.5%	1 3.7%	1 0.4%	5 2.1%	3 1.2%	8 3.5%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		
Q4. 国際性は役に立つか														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. 全然役に立たない	6 0.6%	4 0.7%	2 0.4%	3 2.7%	1 0.3%	1 0.3%	1 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	6 2.3%	0 0.0%		
2. あまり役に立たない	39 3.8%	18 3.4%	21 4.2%	4 3.5%	14 4.3%	8 2.4%	13 4.9%	1 3.7%	7 2.5%	11 4.6%	12 4.7%	8 3.5%		
3. どちらとも言えない	221 21.4%	103 19.3%	118 23.7%	22 19.5%	79 24.5%	78 23.4%	42 15.9%	10 37.0%	67 23.9%	42 17.6%	59 23.0%	43 18.8%		
4. 役に立つことが多い	623 60.4%	337 63.1%	286 57.4%	66 58.4%	177 55.0%	203 61.0%	177 67.0%	13 48.1%	172 61.4%	157 65.7%	147 57.2%	134 58.5%		
5. 大変役に立つ	143 13.9%	72 13.5%	71 14.3%	18 15.8%	51 15.8%	43 12.9%	31 11.7%	3 11.1%	34 12.1%	29 12.1%	33 12.8%	44 19.2%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		
Q5. 国際性を身につけるべく努力するか														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. 全く努力する気はない	20 1.9%	11 2.1%	9 1.8%	2 1.8%	7 2.2%	4 1.2%	7 2.7%	1 3.7%	6 2.1%	3 1.3%	7 2.7%	3 1.3%		
2. あまり努力したくない	59 5.7%	35 6.6%	24 4.8%	10 8.8%	18 5.6%	16 4.8%	15 5.7%	3 11.1%	19 6.8%	8 3.3%	23 8.9%	6 2.6%		
3. どちらとも言えない	269 26.1%	151 28.3%	118 23.7%	30 26.5%	84 26.1%	89 26.7%	66 25.0%	11 40.7%	78 27.9%	77 32.2%	63 24.5%	50 21.7%		
4. 少しずつ努力する	599 58.0%	304 56.9%	295 59.2%	56 49.6%	184 57.1%	202 60.7%	157 59.5%	10 37.0%	157 56.1%	136 56.9%	146 56.8%	150 65.5%		
5. 一生懸命努力する	85 8.2%	33 6.2%	52 10.4%	15 13.3%	29 9.0%	22 6.6%	19 7.2%	2 7.4%	20 7.1%	15 6.3%	18 7.0%	30 13.1%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		
Q6. 外国に行くことをどう思っているか														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. 長期滞在したい(仕事・勉強)	234 22.7%	111 20.8%	123 24.7%	26 23.0%	77 24.1%	82 24.7%	49 18.6%	3 11.1%	40 14.3%	41 17.2%	41 16.0%	109 47.6%		
2. その国を深く知る体験をしたい	381 36.9%	200 37.5%	181 36.3%	38 33.6%	120 37.6%	120 36.1%	103 39.0%	4 14.8%	107 38.2%	95 39.7%	104 40.5%	70 30.6%		
3. 遊びや旅行なら行きたい	281 27.2%	136 25.5%	145 29.1%	39 34.5%	82 25.7%	83 25.0%	77 29.2%	16 59.3%	90 32.1%	74 31.0%	71 27.6%	30 13.1%		
4. 必要なら仕方なく行く	118 11.4%	76 14.2%	42 8.4%	10 8.8%	38 11.9%	40 12.0%	30 11.4%	4 14.8%	38 13.6%	26 10.9%	33 12.8%	18 7.9%		
5. 絶対に行きたくない	18 1.7%	11 2.1%	7 1.4%	0 0.0%	5 1.6%	8 2.4%	5 1.9%	0 0.0%	5 1.8%	3 1.3%	8 3.1%	2 0.9%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		
Q7. 日本国内の外国人との交流をどう思っているか														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. 一緒に仕事や勉強をしたい	479 46.4%	222 41.6%	257 51.6%	50 44.2%	154 47.8%	167 50.2%	108 40.8%	8 29.6%	116 41.4%	96 40.2%	121 47.1%	138 60.3%		
2. ボウなどで援助したい	57 5.5%	28 5.2%	29 5.8%	5 4.4%	15 4.7%	15 4.5%	22 8.3%	4 14.8%	19 6.8%	16 6.7%	10 3.9%	8 3.5%		
3. 積極的に機会を促す気持ちはない	310 30.0%	190 35.6%	120 24.1%	40 35.4%	95 29.5%	86 25.8%	89 33.7%	11 40.7%	93 33.2%	80 33.5%	76 29.6%	50 21.8%		
4. 普通につきあうことはできる	169 16.4%	82 15.4%	87 17.5%	17 15.0%	54 16.8%	60 18.0%	38 14.4%	4 14.8%	52 18.6%	43 18.0%	42 16.3%	28 12.2%		
5. できるだけ接触したくない	17 1.6%	12 2.2%	5 1.0%	1 0.9%	4 1.2%	5 1.5%	7 2.7%	0 0.0%	0 0.0%	4 1.7%	8 3.1%	5 2.2%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		
Q8. 文化への態度														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. 日本文化中心主義	101 9.8%	48 9.0%	53 10.6%	14 12.4%	35 10.9%	22 6.6%	30 11.4%	5 18.5%	23 8.2%	30 12.6%	27 10.5%	16 7.0%		
2. 外国文化中心主義	29 2.8%	19 3.6%	10 2.0%	5 4.4%	14 4.3%	5 1.5%	5 1.9%	1 3.7%	7 2.5%	5 2.1%	9 3.5%	7 3.1%		
3. 積極的折衷主義	742 71.9%	372 69.7%	370 74.3%	78 69.0%	228 70.8%	250 75.1%	186 70.5%	12 44.4%	212 75.7%	173 72.4%	175 68.1%	170 74.2%		
4. 消極的折衷主義	160 15.5%	95 17.8%	65 13.1%	16 14.2%	45 14.0%	56 16.8%	43 16.3%	9 33.3%	38 13.6%	31 13.0%	46 17.9%	36 15.7%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		
Q9-1. 外国経験(留学または滞在)														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. 1国ある	106 10.3%	56 10.5%	50 10.0%	8 7.1%	40 12.4%	39 11.7%	19 7.2%	0 0.0%	14 5.0%	14 5.9%	20 7.8%	58 25.3%		
2. 2国ある	21 2.0%	7 1.3%	14 2.8%	3 2.7%	3 0.9%	7 2.1%	8 3.0%	1 3.7%	4 1.4%	1 0.4%	2 0.8%	13 5.7%		
3. 3国以上ある	33 3.2%	9 1.7%	24 4.8%	0 0.0%	10 3.1%	13 3.9%	10 3.8%	0 0.0%	1 0.4%	2 0.8%	5 1.9%	25 10.9%		
4. 一度もない	872 84.5%	462 86.5%	410 82.3%	102 90.3%	269 83.5%	274 82.3%	227 86.0%	26 96.3%	261 93.2%	222 92.9%	230 89.5%	133 58.1%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		
Q9-2. 外国旅行の経験														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. 1人と親しい付き合いがある	128 12.4%	63 11.8%	65 13.1%	21 18.6%	29 9.0%	45 13.5%	33 12.5%	2 7.4%	40 14.3%	32 13.4%	23 8.9%	30 13.2%		
2. 2人と親しい付き合いがある	48 4.7%	20 3.7%	28 5.6%	4 3.5%	13 4.0%	22 6.6%	9 3.4%	1 3.7%	14 5.0%	7 2.9%	13 5.1%	13 5.7%		
3. 3人以上と親しい付き合いがある	173 16.8%	85 15.9%	88 17.7%	12 10.6%	54 16.8%	58 17.4%	49 18.6%	2 7.4%	15 5.4%	36 15.1%	25 9.7%	95 41.7%		
4. 親しい付き合いのある外国人はいない	683 66.2%	366 68.5%	317 63.7%	76 67.3%	226 70.2%	208 62.5%	173 65.5%	22 81.5%	211 75.4%	164 68.6%	196 76.3%	90 39.5%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		
Q9-3. 外国旅行の経験														
	全体	性別		年齢層						教育機関別				
		男性	女性	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	保幼	小学校	中学校	高校	大学・院
1. 外国旅行の経験は多い	242 23.4%	81 15.2%	161 32.3%	15 13.3%	72 22.4%	89 26.7%	66 25.0%	5 18.5%	46 16.4%	51 21.3%	48 18.7%	92 40.2%		
2. 少ないが、外国旅行の経験はある	633 61.3%	358 67.0%	275 55.2%	69 61.1%	202 62.7%	202 60.7%	160 60.6%	15 55.6%	181 64.6%	149 62.3%	162 63.0%	126 55.0%		
3. 外国旅行の経験はない	157 15.2%	95 17.8%	62 12.4%	29 25.7%	48 14.9%	42 12.6%	38 14.4%	7 26.0%	53 18.9%	39 16.3%	47 18.3%	11 4.8%		
	1032	534	498	113	322	333	264	27	280	239	257	229		

と比べると、むしろあるという方向に傾いた回答結果であったことが異なる。

性別では、「大変豊かである」「どちらかといえばある」の回答比率が男性 19.8%、女性 22.7%と少し女性のほうが自己評価が高いようにも見えるが、逆に、「ほとんどない」と「どちらかといえば少ない」は男性が 45.4%、女性 46.2%と低い評価は女性のほうが多くなっており、全体としては明確な違いはないといわざるを得ない。

年齢層別に見ると、「ほとんどない」と「どちらか

といえば少ない」とを合わせたものが、20 歳代：56.6%、30 歳代：47.5%、40 歳代：43.2%、50 歳代：41.7%と、年齢層が高くなるほど少しずつ少なくなっていく傾向が見られる。年齢層が高いほど自分の国際性はあると評定している者が多いことになる。早矢仕 2011 では、学生において修士課程大学院生になると「どちらかといえばある」とする回答比率が 20%を越え、博士課程大学院生ではさらにその傾向が強くなっていたことを、大学院進学者の語学能力が高くなっていることがその要因では

ないかと考察したが、年齢要因も加わっている可能性も考えられる。

所属教育機関別の結果を見ると、国際性が「ない」あるいは「少ない」と答えた者は、幼稚園・保育園：74.0%、小学校：50.1%、中学校：46.4%、高校：47.8%、大学・大学院：34.1%と中学と高校は数値的には逆転しているがその差はわずかであり高等教育機関になるほど自分の国際性がないという回答は少なくなっていく傾向が見られる。逆に国際性が「どちらかといえばある」「大変豊か」と答えた者の比率は、22.2%、17.4%、19.7%、17.5%、34.2%となっており、これは大学・大学院が特に多い。学生の結果では国際性が「ない」あるいは「少ない」と答えた者が60%を超えていて自己評価が低かったが（早矢仕、2011）、教員の場合は学生に比べると全体に自分の国際性に関する自己評価は高い。特に大学・大学院教員の場合には国際性があると答える者の比率が高くなっている。これは大学には留学生や外国人教員などの外国人数が多く接触機会が多いということ、教員には留学経験者や研究のための交流経験のある者が多いことなどがこの結果につながっているのではないかと推測される。

4-2-2. 現代社会において国際性は役立つかどうか
この質問に対する回答は、「役立つ+役立つことが多い」という回答が、男性、女性、各年齢層別、各所属教育機関別、すべてにおいて70%台の回答率を示しており、一様に国際性は現代社会を生きる上で役に立つ、という考え方の教員が多い。学生における回答率も70%台となっており、この質問に対する回答傾向は学生も教員も同様である。

4-2-3. 国際性豊かな人になるよう努力をするか
国際性豊かな人になるよう努力をするかどうかという質問に対する回答を見ると、教員全体では「一生懸命努力する」、「少しずつ努力する」をあわせると66.4%が努力すると答えている。大学生の結果では、「一生懸命努力する」「少しずつ努力する」を合わせると63%であり、教員のほうが努力すると答えた者の比率が高い傾向が見られた。教員においては性差、年齢差はあまり見られず、いずれも60%台を示していたが、所属教育機関別に見ると、保育園・

幼稚園が40%台と低く、大学・大学院が70%台後半と特に高いのが目につく。

4-2-4. 今後自分が外国へ行くことについての考え
今後外国に行くことについてどのように考えているかを5つの文章から選択することで回答を求めた結果である。表にみるように、「長期滞在し仕事や勉学をしたい」と、「外国で現地や人々を深く知る体験をしたい」とあわせると59.6%が外国へ行くことについて積極的な気持ちを持っている。これも学生全体の47%に比べると高い。性別、年齢層別ではそれぞれ50%-60%代であり大きな差はない。所属教育機関別では大学・大学院が他の40%台に比べて63.8%と高い回答比率であり、積極的な気持ちを持っている。

4-2-5. 日本国内での外国人との交流志向
日本国内での外国人達とのつきあいについては、全体では「仲間として一緒に仕事や勉学をしたい」、「ボランティア活動などで援助したい」という積極的な者が51.9%（8%）と約半数であった。学生で外国人との交流に対して積極的なものは37%であったが（早矢仕、2011）、比較すると教員のほうが国際交流には積極的な気持ちを持っていることがわかった。年齢層別では大きな差はないが、所属教育機関別では他が40%台から50%位であったのに対して大学・大学院教員の場合63.5%と高いのも特徴的である。これも周囲に留学生や外国人教員など外国人が多いという環境によるものではないかと考えられる。

4-2-6. 文化的態度
異文化に接した時の自文化異文化に対する考え方として、「外国文化より日本文化中心に考えたい（自文化中心主義）」、「外国文化を学び身につけたい（他文化中心主義）」、「どちらも積極的に学んで自分に取り入れたい（積極的折衷主義）」、「どちらも自然に身に付けばよい（消極的折衷主義）」の4つの文化的態度についての記述を選択させた。教員全体では自文化中心主義9.8%、他文化中心主義2.8%、積極的折衷主義71.9%、消極的折衷主義15.5%であり、圧倒的に積極的に両方の文化の良いところを取り入れ

ようという考えが強い。大学生の自文化中心主義 10%、他文化中心主義 9%、積極的折衷主義 42%、消極的折衷主義 39%に比べるとかなりの積極的折衷主義の回答比率の高さが見られた。

4-2-7. 海外経験

さらに質問9では、1) 半年以上の留学または海外滞在経験の有無、2) 国、期間、外国人との親しい付き合いの有無、関係、期間、3) 外国旅行の経験の多少または無、回数、主な旅行先、日数、4) 外国滞在(在住)の経験の有無、主な滞在先、期間、をたずねた。

今回の調査の回答者で半年以上の海外経験のある者は15.5%あった。学生の11%、と比べると多くなっている。教員の中でも大学・大学院教員の海外経験は最も多い。一度も経験がないという者は、他機関所属教員が90%またはそれ以上であったのに対して、大学・大学院教員では58.1%と少ない。大学教員には、教員になる前の留学や教員になってからの在外研究などの機会があることがこの違いになっているのではないかと考えられる。

国内国外の外国人との交流経験がある者は教員全体で33.9%であった。また外国旅行経験は多い23.4%、少ないがある61.3%、ない15.2%であり、大学生のそれぞれ、13%、43%、44%と比較すると外国旅行経験は教員のほうがかなり多いが、これは意欲のほかに年齢や経済的条件等の違いが反映されたものであろう。

5. 総合考察と今後の課題

以上見てきたように、教員たちは国際性に1番大切なことは考え方・価値観など、その人の内面的なものであると考える者が最も多く、ついで語学能力やコミュニケーション能力としており、この2つを大切なものと考えている者が多かった。これは大学生の結果においては圧倒的に語学力が大切という回答が多かったこととは少し様相が異なるものであった。

大学生の回答結果の分析においては、年齢(学年)があがるほど語学よりも考え方・価値観を重視する者が多くなる傾向、また専攻別に見た場合、国際・

文化関連の学部においては語学力よりも考え方・価値観を重視する傾向が強くなる者が多くなる傾向が、あまりはっきりしたものではなかったが見出されていたが(早矢仕、2011)、教員の回答結果と照らし合わせると、年齢が上がって社会経験や国際経験が多くなるほど、語学能力も大切だけどそれよりも考え方・価値観を重視する者が増加しており、学生の回答結果の分析の際に見出された傾向を裏づける結果になった。

また国際性の自己評価も教員たちのほうが全般的に高く、さらに自分が今後国際性を身につける努力をすると回答した者も教員のほうがより高い率であったこと、さらに国内での国際交流や外国に行くことなどについても教員の方が積極的な姿勢が見られるなど、さまざまな面で教員の積極的な姿勢が見られた。

学生にとっては接する機会が多く、また影響を受けることの多い大人といえば、家族や親戚、教員、アルバイト先の上司などが考えられるが、その中でも教員は、具体的に自分の考えを話して聞かせたり自分の経験を話したりする機会が多いと考えられ、学生にはさまざまな影響を与えやすい立場にあると考えられる。しかし、本研究の結果をみると、国際性についての考え方、国際交流についての意識の高さなどについては、必ずしも教員の影響を学生は直接的に多く受けてはいないように見える。つまり国際性には何が大切と教員たちが考えているのか、また国際性は現代社会を生きるうえで役に立つことであり、国際性を伸ばすように努力した方がよいという教員の国際性に対する積極性は、意外と学生たちには伝わっていないのではないと思われる。

1996年に中央教育審議会第1次答申「新しい21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」の中で、国際理解を背負っていくべき若者に対する国際理解教育の必要性が盛り込まれて以来、全国の小・中学校では文部科学省の意向を受けて、総合的学習の時間などを利用したり、各教科の学習の中に取り入れたりしながら、国際理解教育が実施されてきた。そして国際理解教育では、①広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること、②国際理解のためにも、日本

人として、また個人としての自己の確立を図ること、③国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基本的な力を育成する視点から、外国語能力の基礎や表現力等をコミュニケーション能力の育成を図ること、の3つを達成すべく授業が行われてきたはずである。特別な国際理解教育に当てるための時間枠は設定されていなかったが、各教科の中で、また総合的学習の時間の中で、教員たちが上記3つに沿って授業を展開してきたと思われる。小学校中学校高校の教育を経て、現在の大学生の国際性の捉え方があると考え、その教育を受けて育った世代である今の大学生・大学院生の国際性に対する考え方の回答結果からは、国際性には語学力が大切、外国語が話せることが国際性を身につけること、という考え方が強く植え付けられており、教育に当たった教員たち全般的には、国際性には考え方・価値観など内面的なものが、語学力と同等またはそれ以上に大切と考えているにもかかわらず、それが児童・生徒には伝わっておらず、これからの時代、語学力、コミュニケーション力が大切であるということの方がより強く印象づけられているようである。

本研究の『考え方・価値観』大カテゴリーの中の小カテゴリーは「差別偏見がないこと」「異文化理解」「広い見方考え方」「自文化を知る・誇り」「思いやり」などであるが、これら抽象的な内容を国際理解教育の中で伝えるようなプログラムを作っていくことは案外難しく、国際理解教育を導入する場合、語学力やコミュニケーション力を伸ばすためのプログラムのほうがゲームとして楽しくできるなど導入しやすいため、これまでは教員たちの国際性の捉え方にもかかわらず、児童・生徒には国際性には語学力、コミュニケーション力が大切、ということの方がより印象強く伝わってしまったのかもしれない。

平成23(2011)年度からは小学校5、6年生に外国語活動が、英語のコミュニケーション力養成に重点がおかれつつも国際的視野を広げるための領域として導入された。また平成25年度、文部科学省は小学校低学年から英語を導入することの検討を開始することを発表した。近い将来、小学校の低学年から英語教育が導入されることになるかもしれない。このような流れの中で、児童・生徒たちには英語力

または外国語力を伸ばすことが大切であるという意識がますます強調される状況が起こるのではないだろうか。

今後、企業からは大学生の新卒採用を見据えて、大学に求めるグローバル人材の要請はますます強くなるのではないかと思われる（日経キャリアマガジン、2011、西澤、2010）。久原（2009）が、「日本の若者をグローバル人材に育てるために必要なのは高等教育機関の充実」であると述べ、「日本の若者を世界に通用する人材にするためには日本の高等教育機関を国際競争にさらすことによって、日本の若者の中からグローバルに活躍できる人材を育てるとともに、海外から本当に優秀な人材を日本に引きつけることが必要」と言っているように、大学など高等教育機関は、いかに大学教育の中でグローバル人材といわれるような資質を持った学生を育てていくか、また大学の中に国際性を涵養するような環境を作り出していくかということにおいて期待されている。特に、大学教育においては、語学力のみではなく、より幅広く、しっかりとした考え方・価値観をもった人間的に豊かな学生を教育して社会に送り出していくということが、真剣に考えられなくてはならない時期に来ている。本研究の結果から、特に大学・大学院教員は国際性の大切さを意識しており、語学力だけではなく、考え方・価値観など自身の内面的な国際性を伸ばしていくことに積極的な気持ちを持っている者が多いことを考えると、より豊かで幅広い国際性教育を大学において実施するための要件は整っているように思える。大学教育の中で、語学プログラムだけではなく、教員たちが学生たちに積極的に国際性豊かなグローバル人材を育てていくために自分たちの持っている国際性についての考え方や積極的な姿勢を学生に伝えるための、より有効な教育システムを構築していくことが、いま真剣に考えられるべきではないだろうか。

引用文献

- 早矢仕彩子 2009 大学生の国際性意識に関する研究 現代教育学部紀要 1、141-156.
- 早矢仕彩子 2010 米国人大学生における international であることの捉え 現代教育学部紀要 3、119-131.
- 早矢仕彩子 2011 大学生の国際性の捉えに関する研究—

学年、性別、所属系、居住地域による違いの検討—
現代教育学部紀要 4、33-48.
久原正治 2009 日本の若者を世界に通用する人材に 学
文社
文部科学省 1996 教育審議会第1次答申 21世紀を展

望した我国の教育のあり方について
日経キャリアマガジン 2011 Vol.2 自分にチョイ足し！
グローバル人材へ変身 日本経済新聞社
西澤めぐみ 2010 世界に飛び出そう！ 目指せ！ グ
ローバル人材 ダイアモンド社

受付日 2013年9月30日

受理日 2013年10月28日

Abstract

The word “internationality” is often used especially when people speak about their educational philosophy or youth education.

This study is to know how teachers interpret the word “internationality”, and how do they perceive their own internationality, by using survey data from 1032 teachers who are working for nursery schools, kinder gardens, elementary schools, junior high schools, high schools, universities, and post graduate schools.

According to the result of the survey, as the most answers for the most important factor in internationality, “thinking ways and sense of values” and the second most answers “the foreign language ability (especially English)” was indicated. Then to a much lesser degree, cultural exchange (included communication ability), knowledge and interest for other countries, and behavioral characteristics were followed.

Teachers evaluated their own internationality higher than students, they regarded internationality very useful in the modern world, and they would like to try to cultivate their own internationality little by little. Generally teachers have more positive attitude towards getting internationality than students.

[Keywords] teachers, internationality, thinking ways and sense of values, foreign language ability, communication ability